

ケース

テーマ：危機管理『一体どうなっている。校長を呼べ！』

B市北西部に位置するA中学校は、平成の大合併でB市に編入された、旧A市内の学校である。旧A市の中心部に位置しているため、学校の周囲には、旧市庁舎や、金融機関、商店街などが点在。住宅街も多数抱えており、地域の中の学校という雰囲気が今なお残っている。

校区が広く、以前より大規模校であったが、少子化が進んだ今でも、生徒数650名、教職員数46名（臨時任用含む）の規模となっている。

大野校長は、今年度新たに市内のB中学校から赴任してきた。相葉教頭は、昨年度、隣のC市から赴任してきており、A中学校2年目である。櫻井事務は、現任4年目で、教員のよきメンター（助言者・理解者）ともなっている。教職員の構成は、20代～30代前半の教員が半数近くいる反面、50代も3分の1以上を占めており、中堅層は数的に薄い状況ではあるものの、歴史ある学校として、文武両道を掲げ、全員で指導に当たっている。

部活動も盛んで、多くの部が上位大会に進出している。教員も指導熱心で、特に吹奏楽部は、県大会は勿論のこと、ブロック大会の常連ともなり、全国大会入賞を目指して近年更に力を付けており、保護者の期待も大きくなっている。顧問の松本教諭も採用8年目の若手ながら、自身も楽器演奏のスキルがあり、熱心さも武器に、期待に応えるべく更に指導に励んでいる。

全国大会も迫ったころ、休日も返上して指導に当たるために、日曜の朝早く出勤していた松本教諭は、ある電話をとった。地域に住む城島という方から、部活動の吹奏楽の演奏がうるさくてかなわない。どうにかして欲しいというものであった。

【城島さん】： 以前にも何回か電話したが、吹奏楽部の練習演奏がやかましい。土日も朝から晩まで音を鳴らしっぱなしで、うるさくてしょうがない。町内会の人からも苦情を聞いている。どうにかしてくれ。

【松本教諭】： ご迷惑をおかけしています。窓を閉めるなどして、迷惑がかからないようにします。

と答え、「またか」松本教諭は、そう思いながら電話を切った。確か、2週間ほど前にもかかってきていたな。その前にもあったかも。窓を閉めるっていつても、これからますます暑くなるし…。まあ、わかってくれるだろう。そう思い、その日、最初は窓を閉め、練習を開始した。しかし、練習に熱が入るにつれ、生徒たちは次々に窓を開けだし、松本教諭も特に気に留めず、指導を続けていた。

週明けの月曜日の夜。放課後の指導も終え、数名の若手教員が職員室で執務をしていたところに、また電話が鳴った。二宮教諭が出ると日曜に電話をかけてきた城島さんからであった。

【城島】： プラスバンド部の顧問はいるか。

【二宮教諭】： 今日はもう、帰りましたが。

【城島】： 昨日も電話をかけたが、やっぱりやかましい。窓を閉めて練習をしようと言っていたのに、結局、開いていた。どうなっているんだ。

【二宮教諭】： 窓を閉めきりだと、生徒の体調にも関わります。窓を閉めて練習というのは難しいと思いますが。

【城 島】： じゃあ、なんで、窓を閉めて練習をしようと思ったんだ。

【二宮教諭】： わかりませんが、ご迷惑をかけないように・・・という、気持ちからでしょう。

【城 島】： だったら、何で、すぐ開けるんだ。

【二宮教諭】： さあ。暑かったからでしょうか・・・。

【城 島】： だいいち、なんで、毎日の活動だけでなく、毎週、毎週土日とも練習するんだ。

【二宮教諭】： コンクールが迫っているため、練習量を確保しているのだと思います。

【城 島】： じゃあ、クーラーでも何でも付けて、窓を閉めてやりなさい。

【二宮教諭】： クーラーの設置などは、予算があつて市が決めることなので、学校では何とも。

【城 島】： 職員室は付いているのだろう。そこでやれ。

【二宮教諭】： 職員室は、教職員が執務をする部屋ですし、生徒に関わる資料もありますから、部の活動のために部屋を開放することはできません。

【城 島】： あ〜、もう、とにかく、うるさい。どうにかしろ。

というやりとりのあと、電話が切られてしまった。

職員室に残っていた教員たちは、口々に、「また、変な電話がかかってきたよ」「いつもの、あのクレーマーだった？もう、どうにかなんないかな」「窓閉めろだの、職員室でやれだの、無理難題のオンパレードだよ」「松本さん、変な敵に回しちゃったよね。こっちまで迷惑だよ」と、話していた。

執務で残っていた櫻井事務は、長電話のあとのざわつきが気になり、「どうしたの？」と尋ねたところ、「櫻井さん、クレーマーですよ、クレーマー！」「訳わからない無理難題を言ってくるんですよ」という返事が返ってきた。

『訳わからないクレームの電話か・・・迷惑だな』と思いながら、「遅くまで学校にいと、いろんな電話がかかってくるからね。君たちも早めに退勤しなさい」と、まだ憤懣やるかたなしという状況の教員たちを慰め、退勤した。吹奏楽部は、その週の土曜日にも、いつもどおり練習を行った。週明けの月曜日、朝から地域の城島さんが学校へ怒鳴り込んできた。

【城 島】： 校長を呼んでくれ。いったいこの学校はどうなっているんだ！

【櫻井事務】： いかがなさいましたか。

【城 島】： 何度も何度も、申し入れをしているのに、全く対処する気配すら見えん！いったいどうなっているんだ！

櫻井事務も、なぜ、そんなに怒っているのかわからず、「とにかく、お掛けになって、お話を聴かせてください」と伝えたが、城島さんは「あれだけ何回も電話をかけているのに、何も知らないのか！とにかく早く校長を呼びなさい。そして、今すぐどう対応するのか示しなさい」というばかりで、詳細さえ話そうとしない状態であった。

相葉教頭が、騒ぎを察して玄関にやってきたが、櫻井事務とともに、詳細がわからない状態であり、その状態で大野校長に取り次ぐわけにはいかず、とりあえず、応接室にお通しし、お話を伺いたいとお願いした。